# 斷橋思藻　上

艮　二

早稲田大學圖書館藏

へ 5
1839
1

水茎の浮大高まゝみもなかれ乃
以みやらるゝ里てゆまる小大路の道て
志きなけし爲なもおかるまし芭蕉翁
一流のをしへる以みちの律や蕉門詩経のおも
かけにかよひ久しく婦れハ萬葉とれあるに
都らし文神にもあは仙をも阿りとみらつ
たゝしくわてら以みちをよく人情のまこし

こゝ我来やり学ふにまさる事得たり
おのれもまた鳥羽玉乃くらきにまよひ久
方れ光見る事を楽しみてそのあとをもとめ以
為五七五の詞もいひなれてしまひしより
法境に至るにいまだ其の故友一具なる
祖翁のみなもとをしたひよそほひの
ふかきすがたをしけれは具にまなひ作

来る句の計りにや眉をひそめてもまた汗
にしおもかへり奈良家々のまつりみなまこと
めおもしろきへいはく茶とつたへの活
達なるを知る事能く知りて松の葉の
ら後筆に被りて世に落とし法の外
なりけれは凡を述へて終りなし
雲龍生涯の師は草の露のきはみ中

かの墨田川の水中より一石一字に記
経を書して流されし數十万にあまり
左京のうちも嵐山よりも流されしおほし
おほよそいづれもしらつ一切経を年
ふりて勝るく讀誦せしめし世俗の
及ぶところにあらず阿ま尓あれと縁により
まつ錦にも社思ひ叢集にい



なにさかしきまでよみの數ある小磯
の貝のかずかずに拾ひて老のこりた
うしは波の魚の網をもれしものもあり
またまことしかるに家かたちもなし
見つけ候もとめかならずそのよめてまつ
初編記し思ふところをしるしおきてに
志るしと初花を櫻木の句に表末

ゞ見ぬ人はゆりしらぬ何にも人の心ゑ
りしらで花のみの散るをまちおもひし
らぬいはれなんありぬへし

安政二季十月

萬雅庵由雅識

影橋思藻春之部

歳旦之部

元日や楼乃まちの門からぬ都
草庵

元日や生飯にまつる雀の雑
過日庵祝祥

名をかたく結て春来るに何の人妻

來て今ハ如何にならむ今尓來るハ無き
事源に松のつゆ今に絶えず実に至る
萬物悉く生ずるのはなる所以にて天下に
奴人の風雅の道に於てハ静寂之
此のにて覚来れし経緯法体の吾
数多生れ来る殊し蕉風を為す
当たらぬの乱れ旁なりし然て往
東三千五百七十六里の遠路息乃ち今に

帰り来て阿ゆみし門に待慈母の之
を安しうさせるの思ハ忝なさる
又深くうちわすれし志ありける
雅山郭の月花に風雅なる物を見
し大きなる海草もなくなしてすゑ
うれしくへ心の情ハ来生するを
八雉の皆赴るのことくに自らの中
まことに悉し物事を成し且めて筆を磨

韶光の祝辞ひとふて雪消のへかて古
きこゑ口もこそくりふ西きろ千さ栄
辞へ志らさら留も未た世の
明らけ年の元日みるや里も佳なし
暮やらぬ元日二日三日の郷

辛丑元旦

六十年来叩逆旅明窓浄几
暁天新香煙断変安にて浸

芭蓮斎社裏人

見の有らる志し気て春哉近くかも
年阿なるて隣あるなの近さにかれ
人逝にてあらいさ志らん己来蘂く多
こ諸以りしこちう集めて莫知十る六三
可良水生のむ角らんまか一國をも
治め来配猶らへ中こ戈ふ出きるるいも
さはしらく奥さしかりあへりる哉

仙集かきちらし何かていなあしおこの
ことゝ迄云家ならへ潮る光かきまた
其我のまさる思ふまゝ書あらて人く
もうらふやみもいゐかおの琳文かゝし
けるそ人のかゝしうし書き流らお
の様をかゝしらしとすき家を顧み学
を闘しくあ琳るを纏おれもく所
あいく志ひてこまく文めそら望



古琳へくまの様もきくのしこらあかる
きこし仍の乃ほの仙集を集ゝ各く
縁諍なきとなけるおの琳鐘をけき
多ほて秋の日うまり抱恩上人とも号
志まし たるもありしさや

思の一字ふ書へなくつゝ如花の妻
おかふけのあさ弱恵ふ何とすんハ
何くてゝく 玉川ふ流る月の澱んや

若水やそそきて遠き霊信於
一切経精進乃思ひを起しつゝ
幾千大衆終夜讀経修行の
以清らかに献ずるまへ初日出
大蔵経渡しの志厚く一乗の
素誠教之事
縷乃細さいても分きつ日の跡
淵先生

金津も浦つゝきなみ初霞
埣乃松ほさきりおもひかけられ
第弐の如し咲して舞ふ春の菜
万葉跡のつれ支度や辻まなし
旦より門ゟ葉の日暮前
植田氏幼児のはしけ錢
太箕年しらし似合ひ男の子
たましや名を書くべし女文字

縮つめやむかふ脊や子ゆ貝
蓬莱は河変りぬ浦の景色かな
咲つゝや当年阿ひさしき物ぬれし
丹し肴雑煮の鍬子笑ひけり
破魔弓や水飼のこ膳に廻り
芳尾
髪を像のそこ梅錦つゞりぬ
菊さ戸にはしれ世笑の流かな



うちわたす城は同しき
猫鬼のかずに年男

初春之部

経赤坂の発句書しとみえて
唐人に手を菓かは筆始
はるまへた書こゝろ染し文
仰添も東しや小猿手ぬ
鳥のこゑまつさきすゝむまさ

しく古つへおもてあらためけるに
みへしての嬉しくて
吉川夢や黄金袋を土産にて
家業除のふかき議ある者のきく
初夢やねの出しるみこえおもて
為近の編笠や膝におふしぶり
召ふまれおしめての末し若葉
姐子鈴風こ添其の末系雑

鰺おくれたる娘の手鏡ものたつ
きあさる迄何もなきもの吉
市に持出て米に代へたるに
見過に出きさくさへ雪の蕾かれ
蛤のつぶし汲まさての老小鴨菜
畑芹堅蒜も添へて摘けり
小かりし其留味の生業や仏の坐
先起てる熱れ芹銭きて阿たき

立出く梶被よすの日々野
うち合し老まふ和杖や几帳越
なふ角つや誰ハおりしハみえん空

東宰府

天明ハ旅ふ津くしや梅の花

次峰子追悼

住きし主なき迄梅の咲日の哀

仮初の交里ハ来く家の園よある

さきや病かられる身迄を祝て正月

十二月某ゝ庵ゟ剃髪ある谷

すゝゆく末戎祝して

爲のみこれつ露たまる梅乃匂ひかれ

仰惟釋迦如來方發迷

こゝろ咲らしこに梅西よりは来

獨悟

聞かれぬ匂ひ無き人遠し欺は

鶯之への神ならぬ詠く

日廼色も大くぬやゝある梅の花

里しのう児も喚くり海雲賣

乗草夜羅呂の梅もさきまくりめ

乗進引ゝ人書津能や万れ梅

篠ぬめ様薮日出くくし風ふもり

日くらしまて

速も奴よ沙彌の木夜やうめ比花

字迷皺や西なる奴东風曇

梅さゝ源人の南まかや蔵の尤ふ

閨く針寧のくゝる埜う気来

きわ起て梅斗をしや自讃毀化

是もけた壺くた物りしもくりめ

見くく鱼もれぬきくにあしくくゝ梅

紅梅や岩根なしくる寧作り

根岸伊藤氏の隣几家にて

みちまん鶯見のこし梅和可し
猿か納屋に舟をつなき乞
出てられる梟柳あをしや揖枕
木母寺の常念仏いとまなく賢騒つ
きこゆらん天つまの声は此へ見
あはれなき勢渡し舟におくれんを
佛しと友人のかへゆきて
古墳通柳か念仏きこへし鳥

人やむかしまはら柳かなかなしく
日のちきしや木曽の花の水に死
象下りやたなぞ鳥乃かみをとりて馬
無那篆さす皴にや人におくれ行し
窓せきしや日のさしかゝはしし柳
家つくりは夏をおもふや挿苗哉
春柳や蚕飼のうらめく日の光か
無友負祇子に所書きてよせたる

まてやあら思ひすかしこゝろさらすむしられ
湖のきらりし跡も月習めて大きさ
人の家と思ひてむかさへ翁まき雨をまちて
あさき語り勝まし安子の熱病さる
やとおもひ五月の末て祖翁の二日関のみ
こゝ乃紫乃雲のてあ句の一句

大津絵のかくけふ手をとる椿の丸

蕨深の雲かゝるうきこころつゝ古筆

柴舟つる鰈の句や落つきき

由哲子の句を贈りして

蚕の新乙女清き紙の名のあるし

口拭く葵の腰に清し末の川の花

松の木郡　頭おもし象の井筒のう

鶯やたゝ出てさうのまきにますかし

沈の白きら死す浮ひかすあたれらる

うくひすも思ましおつへ四寸　硯　竹祖

黄鳥[illegible]や　根[illegible]し雪
[illegible]附[illegible]
[illegible]ハ隣[illegible]
黄[illegible]や[illegible]
[illegible]破月に起て[illegible]
[illegible]や雨二度寝[illegible]
[illegible]耳[illegible]芳野駒[illegible]
懺法の[illegible]百[illegible]

[illegible]萩[illegible]の梅
美しき[illegible]柳[illegible]ね[illegible]
[illegible]や坊の梅
[illegible]里[illegible]
[illegible]川[illegible]伊豆人[illegible]
[illegible]
不二の雪[illegible]海苔の味
[illegible]貝割[illegible]

まつ草や小庄のさむし猿沙かな
※つかれし雪多ふさく膏つきさ
栄於會子住る人いいさおそおかつ
ぞれし

豊年わ幾志り濁りく雪乃味
雲吹く来ちなり野ふまれ墓
初草のそくろぬ嘘や葛のたふ
元はいえぬ味はもかし野苑々ふ

秋うつらわきくやかな耳深し
きて狂あく事志ゝは土筆摘
猿ゐつ浅土手の篆葉やつくし
蒲公英のかふあるこ阿とる実もあいそ
雪の白桐まさつ勢い山葵かな

蝶巣亭
庖丁は伝代の手や木の芽時
いさくねき一夢はのしあ木かね時

気のつまる書ものゝ果く木の実ゝ秋
朔日出て旅寐乃余所に行
古刷毛のかゝし拭ふ縁の家
とゆかり家路あいさつふりす宗匠奔
まゝ旧阿ちら余のんの山路の郷

閏五月晦何かし別業にまかりて

泥雲女佛葉のうへに杖つくのん

貞祇居士茶毘のとき

花とふる雪の阿とさきや雪途
ふりまつれ麿ちかくれや春の雪
雪ふる野の年いさのかしら矢もふ藤の中
里人の花報買申く雪縁のあ

中村宮

日のあるうちに風さき出し雨のゝん
春の空や雨のしき蚕の蒸ひ桶
謡ふりして跡梅出たや山寺の風

はるの月さき阿蘭陀の塔へ入れ
誰か来る月も綿子葉の風味
わかる月光り柳ひく人はこの影
菫摘む名残や牡の銀月
わかれ諸扱や先客人は袖角燈
後刈しき小跡〳〵や清き清
藤へや五月見まふるゆしき
農父への寝言つきたる製形の客

廿九日

正月はあま襟彼岸の日の雛
海にきく人は正月謡はる春
正月は先まきまめて田植の郷
正月の八日縁日の寒さの那
ねるかれはわかゝ摘んで梅花の月を
さくら節の雪に踏みし桑木の客
行燈年出代の前後把針業

出かはりの比里ありまつ里の雛
出代やふるき嘆き手織もの
うちまたく鳴の家数やそのゝ侭に
風の花夢まで伊勢に　卯
鷹匠手しみな空にまたしひんぐ
うつの子に乳ふさぐ雛かな彼岸の雷
寒鷹場のことはりやしはらん蕪
涅槃會やたしまる過し山蔭の香

新ものかきかへつかや涅槃像
ねそえん像珠数あふさきを画絹かな
阿かふま夢先時よし西川忘
坂上村まで
のどかなる十銭よき奴人あり若浦
主従のはなしかたりも栗哉

十五阪

あるこの日黒善しや藺田返す

象松窓の衣新を傳ひ海かに伲
詩の藤縄角かし雁来史へ衆か
五堂月に扶臺の窓にすへ結ふらし
一些甫子挽ゆきて猶らくれきし也
涅ちんの白家かりけり

陽炎の身我ゆうてちん火まつの旅

洛外岡崎 於世継氏の別荘にて

まと史く

陽炎わ蔀堂川 杣を墻根こし
かけろふや仏師へまゐりける家 灰
加茂の谷ふすやし古 楓ものたし雑
陽炎やそこともしらず人のうへ
に紏ふや来るし鈴の見きを傳

日暮 浄光寺

人丸の宮ふきこへし来らい
あへ形結鳥串 割 黒ちうら家

巣こもりし親を見まりおもふらく
母為造物君得嗤
捨ふる子蝶となるらん我世のれ
城中寸土如寸金
寸金の庭にも志ゝ舞ふ蝶
たふ鉾や行基まかれ往きとら
蝶うれし巣しかくらしゝ何くらし
狐あら傍蝶には人ゑらく喚野らく

菜園や露たふ蝶はすき嫌ひ
くさまで蝶に似ぞや死小なふ
似気しと見ふ蝶の声淋し
ちき捨し菓子与像や物忘れ
咲き余の去も初蛙
あしもとの深雲闇の蛙の那
おゆけてまれるにつまき鳴らつ
おきなし乃忘れ鰌やあらく蛙

水ゝのまつはにけふや蛙かな
一夜〳〵宿の寒さや清寒の聲
我きく亭
命ともしらて喜ぶ蝉男しけ
分あるを清むくおり〳〵ちかく田螺
朝中のこゑ阿子中やたふし葉
西りぬともしく鳴かめし
やる田めしゝ兼ふ中さ額かしゝ

繪馬ゑの書物かりへや蝉座
彼岸かゝはる繪相や蘇心かり
明ちかく家根葉春し雛子の声
こゑふぬ雀子の性根や子つゝれ
南気に濁るゝ見や雀子聲
灰小屋の小山のちつゝれ雀子のこゑ
芭淙子旅寐して我思ひ出く
茶過て寿波かとふやぬれ乙鳥

玄々也　婚て何そハさ話しさよ
濡津きぬ舟塲の李散ちまし
土　つけて身ぬ哉飛行　何消る
都燃えいや　酒の錦千庭摩し
菜　蝋甘浅　飯ね子阿きや　祝すぬ
来事　晒景　肩　遊ひや　何千里
さらふ行ら　鳫ハなからめや　麦の丈
鳴つきてらむき舟また　明る　雁

子哉　摩子披ら不行　や　天津　鴉
いさまし　志のなれもあまあ　雨行中
手こらへ　悲しき傷子　傍らん　接　続ハ
まふ蝶の　奴　風ハ　厥ふ　接　おうまふ
花もあハ　友ゆ々也のし　や　つきら　續　时
星子きへ　もらハ　哉よまて　接　木ら　那
陸　猿年　河らの　映りし　つきらら　雞

羈中

烟たつの出ぬ里もなし筑波山

松峰庵ます

鶴なくる田井の流小まつ川

あし氣春たちいつ脊ばかり独たちけり

なきしたや皺手に老のうけもやし

人とめて月に枸杞つむ庵の娘

さらぬとや灰汁の出かゝる小手枕

日の伸る程ぞあく汁汲　藤汁

般文ヶ日残して灰汁出すもの多し

不化たちの藤がききらふ　赤井

明家の橘根に独活の実生え

菜殼花や花ありの尊八門徒寺

たのもしき秋の夜ふけに大和巡かな

其の葉かげや出村はなし茱萸の枝

あら花やみのこゝそみはいへ　二軒

やましの山

はる秋の花よりさきのまうけ
あふ年憐人和らぎて御用に立
なれきこそおもふ見るに御用に立
裂衆の志ありて御用に立
買ひ物の錢かきや御用に立
やまぶきの尾をひく水にうかむ柳
步に花よりあくやうかひかな
こゝろを見すゑて慈悲循生の旁

武士や雛箸さし付て人の中
鹽梅あはす文字案じ出るあめ
雛さまや箱にわりしき料理緩

十軒店にて

ひな市の里にもふけし菱の富士
出やまぬもとめ色めかす楼の娘
京人や立よりて扱う数ゝ餅の餅
追はるゝまゝに来やさふやと草の花ち

寒色の夕や江乃嶌の坊 ことより
清影 併せ二 首うけし 婆のいわ
おつき十吉牛久が室
雪かけ おもきふる雨つゝし 千雑くし
嵐ふきて八牛まゐまうけし 波らの雨
きよきらめや 中桐らの雲立て 清水まよ信
稜おろす 庫かけつくや 春どの雨
付子の 繁茂る 桐や 春どの雨

ちゝ雨の折しや 森深く招きとよし
春どの 牡丹 中よりの廣さきとの錦
まつの庵に むかし 春のゆの
信濃路 翠山にちりし 春のゆの
年経る 佛 馬の友を逢ふたまふらく
生いらひもとをいまゝらの行きたものかきて
深洲一市 のまや 壮年の清らの東都
まがりて力圭の筆を精神をとらし

今ハ海行箱館の港にまさりて天の名
の芳川しきる胡沙ふく東風のかへるか
に右のきこえへたるはつゝましたまひて
面をあらはしは既に十八年の星霜を
をくりたる都鄙たびに変りてつくしこと
に河のこる外かるの栄えてあるはぬと名あり
彼等ありいふる蔵なりしは見し人もあまたありく
て亀井の梅に袂をつらね墨田川の梅に

筆をとりあらそひ煙にに律波をつかひけ
速句にくゝるもの旅吟くは志をのこすに之
十日。餘のあり免しはふしは馬のなきもとむ
けれんとおもふに後期のまこのり難きをおも
もへハ視をふるに動かしていつくまで候はぬに
あきんとす

花過て何にあかさん目の永(?)
永き日や鳴門を越し鯛の味

あつまりや温泉への跪て滝まつり
何さして人をくるしむ日にかなふよ
立やまきさ日残さへ取く思ひけり
初人の餅一斎の井に見ゆし
平井松應堂
涌きす再て喰物ねかふ日和か那
涅ちんとなす落して来る花の角
おしろの紙かみ角の落しあと

何の芽をふくみて花のむかし角

巫山の夢さめしは諾越人の筆なる
さまざまにしてゆめはかなきへしにも
の名をつゝむ神のあふぐまじき
碧楼朝闇一時の灰燼となりて
まや松の渡り進みて捨つる世の
めぐる流れの花川の土橋の
たゝみ家の棲ごもり伊勢の磨けし

波しぶきに河しほて猿聲悲
の色なきのなきかなしむ月
かまはぬやしきや

乳山
茶人のまくらや西の岩
若葉待こゝろ北澤のいなを見り
下もし紅敷きく花に塵取を雑
日気しぼりのふ人前に蓑取ましし
道灌山河あはきわすれありきとし

見のまちはしれつゝ花をまちかねたり
暮の鐘に峰をそえる花見る
金砂山
幾重の雪けのみねや雲の梯
荒多山
人くを花見のこしておかね
木のしたやさしの露花のつりな衾
たまこえて清き白露幣をたまへ味

笠は簑かくれ行のし花の尾

望志ら奴老は花に無ゐ勝にけり

花に来て許されや淋し西向し

花乃雨ちらは雲く濡りて来れ

堤笠の日まて月影の木挽手あれ

膳時は志ら紫やくや花の宿

まゐり鋪迄は花に風をり穂

花に蘇てふや手を重の卿の へ

草臥は芝ふきいまた留雨の雨

雨風は日数のかけ動や花浅けり

うち捨の野りや花に狂ふ蝶

花に来て吸ひまき日数かな

山王山

一里くく花や上野浅妻川汁に

對塔老人の一周の忌に追善に乃

倪試まつちきむ根の塚にて詠る

死ぬるまて誰しも花に旅のそら
袋田村滝三重寺

しはらくは花に柳もなき滝の雪
萬事分跡之

花鳥や何とて人にいはれなし
藏經轉讀に伊東野にて角吉

浅茅ちる身にゆかりの花ぞ抄
いんてんしりてめてたく 隅田川峰月

し亭

ちりかゝるの花は見える落葉也

上野

法なれや竹の宮様まてる花長者

京は友人を招きて

花に鐘くみのあけほのや三数家

送別

旅衣きるこちのくまて花知

飛鳥山

花のもとにしはしと鶯やゆかめ

乳哺摩頂のいつくしみにこたへかり

そのむかしよりまいらせけるさまにてあつき

神も山ならぬ深き数の経にて見ゆる

はるかの雲にたゝ藤かゝりし鍋を

このきしらほ皮の顔をふるゝ深く

し潟へ御きゝくふかなる社の流

さきんゆくゆり

花野にて旅なる人をたのもしき

三月御停止

所木戸ゟ西はなれて新ふ道まるゝ

まゝ老人の一輪をうけて

山ふかき跡をみて花もかくれし山

寸美栄川畔

篤 くま人の出てみ日は花見る野

此寺境内を観るに無乃河りし所
芭蕉ゟか壬生の楠成人てをのし
諸かくやし所へし芳舎に那
すゝんの掟あれを深く深き芳何房
に留る彼挑して如きの國へ下り
けるとそ
予が云へてと来て萬ず旅宿ふる
正像未和讃をいるに高く讃ふ哉

末法無人と云ひ何を花咲かり
何某庚別業
花の為に讃代あるへし下登處
今し野竹林院に何かし比橘木坊
得て蕉翁の肖像を彫刻せんとるを
きのふは桜木を出山精舎の神本に
しく芳野に三の好人八年をふゝるゝ
下しむあらとや仁元に営しし下

さくらこそ艶なる花の姿しき神さびにけり

墨田川

嫌ふれは花まさりなし　物ともなし

堤にきてされとも舟の奥や尾花に

人の世上野も花も桜の都

遅れゆくちるや名残の鐘の声

矢背大原にて

門院の古き日へも連割りて

咲く花の余波さんざん木

母ちゝ見送りし瞬息の女

一すじに過てきのふはまた藤部田

甫の花まさに残る

ちり残る桜の送りのあきなし

紙雛の讃

讃やうすに似し白桃のつかさの寿

見めぐりし桃ちる下乃妻の丈

秋たつて桐に人まし一葉の花
連翹や篝もあらす振袖に
きん魏やかゝる蝶の夢こそ路
海棠は寝けたつみし吉寄
くいよりまいるの日はな気色かな
海光そよぐ李ちる夕日かな
山里の鶏啼まして辛夷咲
ちかしきの辛夷に山の月清し

見出しけき花に人きあり　松楳
人は文字をときよく
寄年書きうつもの残つるし於子
重砂山にての佐々木氏の鍾愛
楓残門文て樹をかゝし家室
断崖断巌をとちの外にて五十町
緑にして廣く窪たる
雲子の坊あり楼の大桜ま

こし路へ越てはしはらのきゝける

霊跡あり

寒柳とつし曽我兄弟かかし

山吹の古名も何まましいきかうな

やすらふきやうつらひ安き塚の桜

那須野

牛飼ひ遠小鶴ふきうめせし旅人

神さひし殺生石の松落葉

笠おをく

汐風に頭をうきて董の郷

狼の頭变は春を寸菜連この難

お秋へ行道や董をふてうまうくも

鶯も芳おかまあるや不出かな

白兎もひらふきつや藤の落朝

旅ちけたるきうさくあし藤の花

まし〜たかひは蟻もつゝ梨あつ花

物いはぬ那須侍や梨の花

湖雲ゆるふりとさ紀し㝢
月のきらめきたる浅西子に比擬
さて東坡居士の句にちゝへ添たる給
候し

瀬田の昼　蜂となるところたりしを

花の俊あしこそ仙臺請謝の岸役
日振かつゞる永野松寿に儘寸

供もなき人に心ある遊つゝとうるゝを

姉につかはしたる茶摘乃那り

枸杞菜つむ青や赤羅に綱を結

瀧壺に餅ひろ藤寸茶屋衣く

おのれへき日数算ふ鷺鷹一のまゝ

夕の茶に風まる門外枝のまゝ

日乃春や吉茶にこもる老者面

ふきこねた煙も浦浦やとる花霜

月居嶽　矢内太経球路月捨といへるよし

小出郡村に河内が府公碑建

笠着て野須ぬの雲夜あらし

いまきん風のこしてまつ行

麻らき乃子草ミ生の名残かな

庭ニ尼追悼

みねの夢きえしは春の暮かなしみ

何ゆ此墨は鳥織哉まうけ行

## 釈教思藻集之部

老ほとも人にまかせる更衣

こころの出もいくし更衣

寄生木の花や何やとふさかの人

庭ニ尼初七日にあねかへ

松風月ぬ仏も更衣

捨行く人はつよふの物もらひ

若きて見んと繼あけおはす給ひぬ
年公氏婦なりて書おくれし

上野山

灌仏の東をまつらぬ御山哉

浅草寺

花の雲鐘はきそへてや志らぬ時かな
灌ぶつり山はむかしもおなしからぬ
灌仏や見るわらへは詣て来る

花の雲長男に辞儀ばかりかな

四月十日

思ふて二日おくれたる夜書かれ
其ころし弟ふ思ひつゝ夜もすから
深川閻魔堂橋まで参りてまいる
ところ地名ありいかしへ臺盤所の
検蔵ありし変あつて

杜宇むかしの検蔵名にむかし

四月十七日
安國殿御禮
郭公なくや[illegible]旅の　獻雛稼土
氏家富士とまりて
郭公啼やきこえれ　苅葱汁
車井を初上るたんよりつる
をかけて
とふて[illegible]をふさき鉦の寒[illegible]寸
郭公人啼きまてかほかなし
[illegible]毎よ生珠やけん[illegible]
蜀魂山のふかきはたのまれ寸
枕きゝし我まて
[illegible]
[illegible]
[illegible]　杜鵑
[illegible]

まかりても猿は寒さに不如歸

霙には橋の手すりに待あはせ

坂本山王祭禮

濱なかの神輿に浪や手はさき

上加茂のかへるさ

係るも藤つきてや紫刈足たゆみ

さくらも雲の根にあるを跡

掛ます葵しかけて何とまくる

枯草仲まくらして花ゆかし

繙よ蕗ハ咲く鹿かよ通ひけり

世は井へ背中見せてや雪まろ

取たる人の雲ハ関吉

うんとの鳴や祇園のうちはゆ

瀬の川

篠さらて目のくらみて瀬ゆく

葉にもれて鐘に叩きたる春なれし

上野

叺も拾ひ雉子が出るや櫻の実

山蛙の鳴しきりやくまの祭りかな

木諌め梅より出てあゐ菊祭時

菱華に志ありもとの矢立の糸

舟倉に人の出這のゐ哉の春

甘酒にうちまきに酔ふや木の下音

常磐木のちる中に芽ふきぬるかな

言ふ楓紀あり枇杷の花もとより

大かめやる被のうちや菊楓

病後

牡丹見に出たれ老の杖たのし

うき世のちりて帰りし牡丹かな

祭にもち花見に行て牡丹哉

口をしう蕣のうつる哉とんの紙

貂のよき料理喰ふ旨たんとち

菖蒲や調合の香は　吹より先
菖蒲は見とめしちらは　茶の鉦
もり立し精進もやまつたき
茶匙に尻かさ　杜若
うるしき中に霧あり　燕子花
川かねに手成出寸余の子供かな
川骨や盥を丹に繁廻し
汁粉や紫濱にきしきあかり

日吉貞之丞鉢木

卯の花乃雪やさまよふ　謡物
卯は花咲り杉えてかる岩井かな
宇都の浦やかあへん出寸雑魚鯰
う乃花やもの刃しけさる蟾の声
うかれ初の和歌花垣に露世々耶
和のきたれ墻やましく　生の角
兄々の寸や　橋の香く行見は跪

たちまちの昔もやうや　兒の袖

橘おきかへしりける　仮住居

立花まゐりおもむきしや烏帽子折

川芥はりかりぬれなきし　萩の花

香炉ふるゝ人や萩のまたおつゆ

須磨

名うし世は夢にこそまつや　あましのまち

ふ宿して数しるゝに芥子は花

…の事はたゝへて消やけしの花

花にしやほかに人町の暮かゝる

摂津國江口のほとりにて

人とめる柳さへ見えぬ芥子の花

香魂夜逐劍光飛青血化

為原上草

捨のこる錦野にさかまし美人草

そのまゝ見たき露哉　閏見美人艸

起しや牡丹や蒔く茄子のあたな
艸のうつすしや茶山はけふくまつり
竹迺子や廿日の雪ハ二三寸
大烈雪ふらぬとし比
たまめのこやしはしれて盃る祖の尻
四月十四日二句
鶯も光まやを添し床の花
葉のまな綠るふ秋かり過たけ哉
籠ちか掛し黄鳥ましかり
標つ黒あさく花もなし初松魚
ものめよし鄕のつゐやかねの文
堀内途中
道しや實乃麦こうしし
ゆきゝ過る人呼へ字新茶のか
堂寺の國をなしける志ん葉かな
左爾亭にまねかれて

手寒く袂つきたるゝ何や酒
雨もよひつくろふてふく菖蒲かな
盃をやりへてかしく出来る業
まつ幟まなびぬ村の質屋かな
落しに行家やしきのかの
あちにきみ先まなかつ辻ゝ花
似くるを聖いくるも何かを祭かな
神風のたちかへる絵馬

余所がけに麻つゐやまゝ乃秋
麦苅や宿の遊女残す唄

五月廿二日の夜当座一巻

堀つゐ来しゝ鶏を夢に吹
思ふぬ人おもひをまつ水鶏
菓子ねとき揉しゆらや鳴くひな
営田にあらし種時や帰くかな
因果ふかき人に情まる継への部

鮒鮓にいつけさまし眺めて

鯰の鮒をさかてまけうし鮎の鐘

鵜篝の消ゆる方たりや網十場

うきおも流し鮒は出たき探るゝ哉

篝火さきを胴つかひするあら鵜かな

鵜人は小樽もち携てかゝりうの船

咽ふきて縄いたつのまゝ鵜匠哉

先いくしは鵜篝ひ綱の鵜かな

鵜つかひや衣手あまりし縄捌

松の明く散るを眺しうつ舟

蔥ぬ花を見せける蛍の船

川筋の行く流にそよる蛍かな

小笹乃灯にまよひうらふ蛍この宿

曙ふもや暮まつ見や渡る籠

うけ草の網けを住行蛍かな

月かくれし蛍の影澪や枝垂る

琵琶橋

月よさや銭金沢の坂にきこゆなし

乃邑　墓来

清しさる椿にこもる薮坂の秋

雨もむ打やねくまじや番手さい

跡へ死さきへも手まくら莖の番

病床

頃へも懐ても坂屋をつらきから

岩城小名濱

蒿はきる秋魚や堀のたまり中

吹のさけ中秋も乾嫌かな

馬の尾跡蚋に踩ぬし笠合越

柳から荷鞍へとふや枝かいつ

枝かはつ鳴や物にもためらはぬ

草尾

夢こもる葛が茂りや枝蛙

菜市のあと掃寄や枚娃

蘭を生し河原ちかき小堤かな

御領堂由阿弥の制しける城こそ

のもとよりまうきたる哉开きて

詠め諸こそは共に麻や日枝風

ものいひつきゝ漆おもしろし麻のる

上岡貴や旅に涼し井生の水

松蔭ふ身をかつるの曳森かな

丙午火災のゝち建もつる家居ある

のさき

いふさらに蚊帳四尺五寸睦月の奈

世はちるしは花まち立旅やゆかる

一石橋を通りかゝりしも立さの

うまひしたる浅見かな

百年まへ懶つまもる橋かゝへ

晏起

光やさて日の出お蝋に鉄夢か
ねつ起川難や八寿に破蝋
神ー節に祠もん出あるの穴
廿みの露道
蚊屋漕ぐ娘無人の手に蝶来たり
猫川高し真中や祠と雨の林
廣瀬ゆき人夷残帰て来顔の
戸ゆくりあらく菊くまのとしろきさ出

うる並にて太く市街のさまおもひやり
捕まる盗都をかし斯ふき小盗人
みえし一かやよ湯屋家のかけもとこ
短夜や己が軒端耳に入
みすが柳ぬ難あく明段垣一重
こしの松弥まち梅花に明にかけ
見あるのに時香かに柳り明けし
行燈かつい夜あけて夜の月

旅寝の河うらに文て宴の月
鐘たの塔に拝ん夜の月
浦の月斎照おほく魚に河梁
ちつ秋の月ハかゝれくさ野ひいつ
瀬乃ゝひいるろや蛇霞まつ
夜あねはくまは坂やつゝいちこ
春霞まつや山伏たちあるふ
めくる馬西まいて掠寸舟出呉る所



古城や梯の何とく花ほとよ

大森村

青梅や麦ふう海る舒の舟
あをうみや様もう家に笑ひ声

一 在爾亭

紫陽花月筆の夢みくる簾葉かく
阿ちさゐりく蘇くらめ蔵の小家かな
撫子ま浅たりまくるや婿檪

瞿麦のちやくは露けれたてゝかれ

日中の焔熱をくらしつゝ

能々那須野まゝる

身杖うへ百ちゝ遠近り拵[illegible]吹嵐

山寺の杉あ[illegible]や百合ある墻のかげ

立鉾宮

萱茅の花[illegible]や神子前

萱茅宮京ちゝ紅葉の[illegible]生ゝる

可使食無肉不可居無竹

[illegible]竹ら無世

竹植て[illegible]人[illegible]あ梨

たゆまり[illegible]門の[illegible]嗣目[illegible]

二十年の[illegible]深まる[illegible]

安月[illegible]

凡道[illegible]

山梔子の庭や[illegible]余の小盃

餞　素峨子

明わたる月あふちの花や色くもり

引しほや蔵のまゝいつらの傍

うきくさや三升まても日和暮のかり

うれしさてゆりかけきぬや早苗時

沐浴して旅立なへをそのりん

倣祖翁口吻

旬もまくれ田うゑ豊蘂よ旬し

くたかけのなきさまに起て田うゑかな

茶やゝ門に待早乙女のあちかな

早乙めの手ゆかりしやや夜かりこ

最上ふり

六月や志まふて湯殿まゐり哉

十七日麻布雑色にて通りけるに

木きらけ頬花や五月の時鳴かり

きのふ暮ぬ豊まて何哉五月やこ

ちる音やり蝶の細草林新
五月雨や油うかへる川の色

須加川 市原氏

すゝみかね焙烙にうける埔の奥
浮草阿ふれて棹さはか舟かな
女覚ハ人に及ぬうき菓かな

長岡岳山喜人の蘿娑に

さ桜のしと樓におもふやさし衣

おのか声て梢ゟ蝉のなく
茂る夢や髭笑ふ目覚す蝴の鬼

山行

おもき彼方も淋しや蝶のこゑ

山王社

神無ミ旅の留守や世の春
咲きまる菊のうへに秋を思ひけり
明やすきあさかへりて照射かな

名越へ一派の貫主を仰れたまひ物
営はめぐりて涼めぬるなり一句
奉る奴宿縁の深き愛きぬへし

棟きるは宗室めすりや法の袖

法ぼるも其ゆかり何をあやる蒔

市中の蘭あれ奥や氷うり

六月十五日辨足堂

あからくの琵琶きく暑の形

恵照律院　堅道和上阿毘達磨大毘婆沙論講談

云ふことばへる法の河つもるの船

いさきへ暑き河原や涼波る

夜のあけて志りぞあむ暑さかな

淀川の時計ありつ暑さかな

帆片風のきとの暑や浜前

吾妻森

鈴の緒をゆるみちらふきく夕すゞみ

経名をさす大川に涼しくてあそびのめ
の七笑ぞり川諦衣をかくれたる　宗古子
かゝるあそびにかさし哉　謡をうたひて
青風や亡魂まねく船の中
甲子のよるくましさる
君讃亭主興
月すゝし櫻の下にもの錦本堂
川床や柳の中にけて月涼し

ちよ汁てなほしや月は門　延
月樵子かいさゝらに行く
暮の宮て涼し祇園のよう婦切
人うら路見るる河原をみなら
夜風やねまとの鐘は吹きつゝし
蔵立はなかしは吹て夕納涼
鴨の声平縮のちしに独先まくし
涼みにもや杖みとは蛙聲ぞやき

妙淳信女のために浄土三部経を一字
一石に写し佃島の沖に沈めしと
聞て合掌にたへかねし侍る
秋の海浄土や何の経あらし
千さと出舟浮かるゝや風薫る　海
鷺乃子の葉にふかれぬや舟の末　嵐
夕さむや白紙枯薮の夫まひま
白雨や次郎がくふかし　辺舟

雲の峰波を踏んで歩行ましし
人もなき舟横たはりけし　歩

山王神事
出しものの桟敷はまねく祭の形

文雅の友ひとに先たゝしし世を
宗匠たかし大梅老人の悼
何事もなき汗を拭くらん梨
極治に升破きてやおとも　太

何かなしのみのさきまゝ心太

日吉氏月次

菊水のくはゆゑぬや薬能

摩訶僧祇律稱讃

灯ころす話誠も何の所婦人

岩のねのひさくは清水哉

書写残して

回向し乍飲ひとつなき清水かな

しゝつ鳥当架より白の岩根から

秋いさ鶯汲茶第ていきしく図

煙速衣ふるき汲む奴清水の本

山崎茶園教法功要法者の友

蜀清けり照らす興すくと瓜の光

乃至の戸まんまへてとのし冷し瓜

碁笥置き見るのふきて乞中す瓜

年候ふて雨乃ちりこ葉遠見うふ

見る人もあきても蓮の白さかな
目の中けなる行やまだの上
まつの本や須千軒の墓参
旋花は砂山暑し乙の浜ぞ
飛る影やたのむ木蔭もある野くら
ひるかほや家のうちまでも絹ん
夕顔やうらのしの紙く文つらん
やふの中やよし河へ人の方来ぬ

夕影や蔭に並ぶ大人の荷もせ跪もあ
小坐敷や茶木の葉やかん所暖
麻刈てあらくは蓬麦まく畑松ぶ
秋ちるよ柳のいろや施餓鬼舟
秋をしし葬儀の荷らしらへ
河内の紐しもの本のあたり夜神楽
形代や墓間くにて流れ行